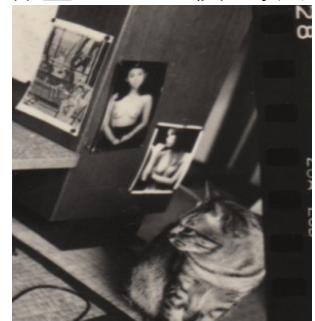


私が若かりし頃、今の65歳になった自分など想像だにできませんでした。しかし、今自分の過去を振り返る時、過ぎ去った時は、それほど遠い昔の事とは思えないのです。過去を振り返る時と、これからやってくるであろう未知の時とでは、心の中に持っている「意識の中の時間」の質と長さの感覚がまるで異なっているのでしょう。そして、時間の長さというのは、それまで生きてきた自分人生の長さで感じるものかもしれません。すなわち、10歳の少年にとっての1年は、自分のそれまでの人生の十分の一であるのに、私にとっての1年は六十五分の一でしかないのです。これからの私の「人生の時間」はもっと加速されてゆくということでしょうか。

時折、40年前に東京に「棄ててきたネコ」のことを、昨日の事のように鮮明に思い出します。時は1970年代の半ば、舞台は西武池袋線練馬駅から10分の小さな木造アパート「さくら壮」(コラム27:赤坂の夜 写真参照)。6畳一間に小さな台所付で家賃1万円、四部屋だけの2階の一部屋でした。ずいぶん古いアパートでしたが、茶道の家元をされている大家さんの庭の中に建っていたので、日当たりも良く、居心地のいい住み家でした。私は若き日の東京生活の6年間のうち、4年をそこですごしたのです。

ある暑い夏の日の夜、開け放された窓から突然飛び込んできたのです。特別な「ネコ好き」というわけでもないのですが、特に追い出す理由もなく、戯れに何がしかの餌ごときものを与えたように思います。バイト生活者ゆえに、ロクな食べ物はありませんでした。しかし、その日から頻繁にやってくるようになったのです。季節が移り、寒い季節になると、窓を閉めるようになります。帰宅して電灯をつけ、少し経つとガラリと音がして窓が開きます。すると、小さく開いた隙間からヒラリと畳の上に飛び降りてきます。ネコが窓ガラスを横に押し開くことができるということを、その時に知りました。立て付けの悪い、開きにくい雨戸であっても、体を上に伸ばして爪を立て、体重をのせて横に引くとガラリ。さすがと言える見事な技です。



部屋でネコを飼うことが許されるわけではないのですが、私は飼っているわけではありません。ネコは留守にしている昼間は外に居り、夜になって明かりがつくと、勝手に入ってくるだけなのです。私はただ追い払わないだけなのです。大したモノをやっていないかったのですが、居心地がよかったのか、そのうちに夜は私の傍らで眠るようになりました。



ある春の初めの頃、何かを咥えて窓から飛び降りてきました。まるで私に見せるように私の前にそれを置きました。まだ毛の乾ききらない生まれ落ちたばかりの子猫でした。母親となったネコは子猫の体を舐めています。私はこの親子のために押入れの隅に「住まい」を作ってやることにしました。そして、乏しい生活資金を工面して、出産と子育てに体力を消耗しているネコのために、当時は贅沢品で

あった缶詰のキャッツフードまでも奮発、ピチャピチャと舌を鳴らして、実にうまそうに食べるのです。あんまりうまそうなので、私も思わず缶詰に手を伸ばして、一口横取り。何にも味付けがしてありません。二度と食べる気はしませんでした。子猫の鳴き声が外に漏れることを心配しつつ、このようにして、私とネコ親子の「楽しい日々」が始まりました。しかし、そのような生活は、ある問題が生じたため、そう長くは続かなかったのです。

ある夜眠っていると、何か異様なものが足もとを這っているのを感じました。。後で見ると、足クビあたりに虫が刺したような小さな赤斑が沢山あり、痒みも感じるのです。「ネコのノミ」です！ネコの蚤は人を噛まないというのはウソです。子猫にノミがついたらしいのです。まず親猫が逃げ出し、居つかなくなりました。だんだんと蚤は増殖しているようでした。外から帰宅して、重い引き戸を開けて部屋に入ると、足元からノミがゾロゾロと這い上がってくるのです！

これは「限界」にきたと、感じました。何かをする必要がありました。私は親猫のためにも、子猫の「処分」をすることを決断しました。夜になって、子猫を胸に抱いて近くの公園に行き、そこに「解放」したのです。まだ幼い「小さな生命」には、残酷で無責任な行為でしたが、他の方法は思い浮かばなかったのです。翌日になって部屋を閉め切って、「バルサン」という煙の出る殺虫剤を焚くと、部屋は火事のごとく煙が充満。これは効果テキメン、すぐに避難逃亡していた親猫が戻ってきたのです。

私がネコと暮らしたのが、どれぐらいの期間だったのかわかりません。半年程度だったのか、あるいは1年以上なのか、はっきりとした記憶がありません。しかし、私が東京を去る日までいたことは確かです。最後の日に私の3人の友人とともに、別れをしてくれたのですから。

私が友人たちに手伝ってもらって、すべての荷物をかたづけ、彼らと食事をして、何もない部屋に一人戻った時の事です。閉めていた窓が開き、ネコが入ってきました。さかんに足元にまとわりつき、甘えてくるのです。動物の持つ本能でしょうか。ガラんとした部屋に異変を感じ、私が去っていくのを感じとったようでした。私はカメラを取り出し、最後のお別れの写真を撮ってやることにしました。そのうちに、私の手荷物の側にうずくまり、まるですねたように動こうとしないのです。体を撫でてやりましたが、反応がありません。帰りの列車の時間が近づいていました。あまり時間がなかったのです。



「元気でな！」声をかけて立ち上がると、＜彼女＞は意外な行動をとったのです。ゴロリと仰向けに横たわり、腹を撫でてくれるように、ねだったのです。何という悲しい目をしているのか！その時、私は「ネコの涙」を見たように思いました。私は抱き上げてやり、入ってきた窓の外にそっとおいてやりました。すると、屋根瓦の上をゆっくりと向こうに歩き、一度私に振り向いたのです。「さよなら。お元気で！」そう呟いてくれたような……



ここに一枚の写真があります。その時、失意のうちに「都落ち」する私のために、三人の友人が来てくれました。その時私は25歳、「映画を創る仕事がしたい」などとホザキつつ、バイトをして映画を観て酒を飲むだけの生活でした。しかし、私も他の三人も同世代で、皆若く元気でした。左側にいるのが広島からの友人の「谷村」氏。高校時代から「作家志望」でしたが、大学入試に失敗し、当時「アテネ・フランセ」で、フランス語を学んでいました。フランスへ行って「パリ乞食」になることを夢見ていましたが、20年前に45歳にて

病により急逝。真ん中でネコを抱いているY氏は、新潟出身で同じ大学の元法学部生。当時は司法試験に挑んでいましたが、合格を果たせず公務員に。彼とは現在も年に一度は再会して酒を飲み、交流が続いています。右側の西藤(さいとう)氏は東大の工学部を出て、心理学を学ぶために文学部に再入学したという「変わり種」の秀才。富山出身で、バイト先で知り合ったのですが、彼については「おっさんのつぶやき・会社編」の(コラム12: 幸運)にも書いています。もう音信がとだえて、ずいぶんと久しいのです。存命であれば再会したいのですが……

かなり以前に上京の際に、この古アパート「さくら荘」を訪ねてみたことがあります。その場所は駐車場となり、まわりの風景も当時の面影はなく、すっかり変貌していました。すぐ近くに高層ビルになった練馬区役所がそびえていました。私にとっては、昨日の出来事のように思えても、その時の写真はセピア色に変色し、すでにこの世を去った友人がおり、住んでいた所には風が吹いているのみ。40年の歳月は、静かに流れていたのです。

1976年の3月、その月の終わりに、「春の雪」が都内に降り、真っ白な雪景色となったことを覚えています。その頃、イルカの歌う「なごり雪」がラジオから流れていました。

♪～季節はずれの雪が降ってる 「東京で見る雪はこれが最後ね」と
さみしそうに君がつぶやく なごり雪が降る時を知り
ふざけすぎた季節のあとで ♪～



「今思うと、みなあの頃は若かったし、夢を持つとったよ。う。はいじゃが、ワシが一番中途半端に生きとったかもしれんワイ」